

## 〈農〉的共同態の現代的意義と、近代的共同（体）論の問題性

### 現代の“人間の危機”克服の視点から

亀山 純生

(東京農工大学)

思想的には自然と人間の“発見”に始まった西洋発近代は、資本主義主導の大工業・市場社会文明によって、現実には自然と人間の破壊に帰着してしまった。この“逆説”ないし矛盾は今、地球環境問題と人類の危機など多様に露呈している。それは、高度消費社会日本でも固有の形態で深刻化し、特に90年代に露呈した“人間の危機”は、“元祖”西欧社会以上に“煮詰められた近代的矛盾”の様相を呈している。その中で、思想的にも近代の批判と克服の方向性のリアリティが改めて求められている。

その中核的ポイントの一つに、〈農〉の思想的意味の解明があると思われる（この点で、日本の近代化の特殊性の重要な要因として、近代的後進性論に呪縛された農村共同体の否定と農業の近代化（市場化）、その延長での農業・農村の破壊、極端な都市化・都市集中が、改めて注目される）。もとより、マルクスをはじめ近代の思想的批判の蓄積は膨大である。だが、そこに〈農〉を位置づける視点は、今の思想界では皆無に近い。イリイチの“土の哲学”の提唱（1990、『環』Vol.40）などは散見されるが。

この点で尾関周二氏が、マルクスに依拠しつつ人類史的視野から現代の環境危機と人間の危機を結合して総括し、近代を超える持続可能な社会にとって「人間と自然の共生の原点」として「〈農〉の思想」を明確に提起する意義は、極めて高い。氏は、現代における〈農〉の思想の射程を簡潔にこう総括する。「現代において〈農〉はたんに食料生産とかかわるだけでなく、…環境、安全、生命、地域、コミュニティ、スピリチュアリティといった現代の思想的キーワードと絡んで現代的な一大問題圏域を形成しつつある。現代の〈農〉は人間にとって新たな思想的意味を提起してきている…。」（尾関2009）

全く同感である。私も一方で、日本近代の高度消費社会の人間疎外克服の論理を模索してきた（亀山1989）。他方で、日本の環境問題の現実から、欧米環境倫理の人間・自然の二項対立を批判し、“人間と自然の共生”を理念としてローカリズムに定位した風土的環境倫理を提起してきた（亀山2005）。特に都市での自然保護主体の形成は、近代の都市型ライフスタイルと人間疎外（特に共同性の喪失）克服とセットであり、風土こそがそれを可能にする場であることを明らかにした。だが日本の近代化の中で失われてきた風土をコンセプトとする自然保護・地域再生は、それゆえに近代化自体の問い直しを不可避とし、原理的に近代を超える性格をもつ。そのことは現実にも、市場の論理による地方切り捨てに抵抗する地域づくり運動のコンセプトが風土と重なることから窺える（亀山2009）。そして、脱近代的性格を持つ風土保全・再生の根幹をなすのが生活的自然との生身の関わりの日常化であり、それはまさしく広義で農の営み（〈農〉）な

のである。

以上のように私は、地域の環境問題を切り口に“実践的要請”として、〈農〉の営みの反市場原理主義の意義、日本的近代脱出の意義を見出してきた。だが改めて、現代日本の“煮詰められた近代”の矛盾を見据えると、そこからは、〈農〉の人間的意義と脱近代的意義の重要さが一層明らかとなる。それは、従来の脱近代論の陥穽（思想的にはなお近代に呪縛されていた側面）をもあらわにする。その射程は尾関氏が総括する問題圏全体に及ぶが、本報告では、特に地域とコミュニティに関わって、現代における人間の共同性の再生にとっての〈農〉の意義について、およそ以下のように検討してみたい（可能な範囲で）。

1. 現代日本の高度消費社会における“人間の危機”（“人間基礎力の崩壊”のデススパイラル構造）が“煮詰められた近代”の人間疎外の窮極であることを確認する。そして、それは主体的個人の大前提が崩れ、疎外論ないし近代の矛盾の意識化による近代内部からの主体的な近代克服の展望が“消えた”ことを確認する。そこから、“人間の危機”の克服方向が地域共同体やコミュニティに向けられていることに注目する。
2. だが地域共同体やコミュニティは現代の高度消費社会（“煮詰められた近代”）においては、原理的には不可能である。それを、近代（市民社会）的共同体論の現代的帰着を示す集合住宅型共同体論（竹井 2007）で検討する。その上で、近代的共同体理念を前提しつつ、竹井とは逆に伝統的共同体を再評価し積極面を位置づける広井（2009）の地域福祉コミュニティ論を通して、“修正的”近代的共同体の可能性を検討する。その中で、“人間の危機”が示す近代の疎外の窮極的核心が、人間の生身性・人間自然の生身のコミュニケーション（生命的響感）の喪失にあることを確認する。そこから風土のモラルの意義に注目し、〈農〉をテコとする地域共同態の意義を確認する。
3. 以上を踏まえて、〈農〉が照射する近代（市民社会）的共同体論の陥穽、つまり伝統的共同体の思想的再評価と現代の〈農〉的共同体のポイントの一端を、一部で内山（2010）共同体論も批判的に参照しつつ、試みに提示したい。
  - (1) 伝統的共同体解体を前提する市民社会（近代的主体の共同＝協同）の枠組みの破綻
  - (2) “自立した個人”（近代的主体）における類的能力・Gemeinwesenの楽観的な実体的前提。
  - (3) 近代的共同（体）論における市民社会と共同体の同一視。あるいは市民社会（公共圏）の基礎として地域（ないし生活）共同体の固有の意義への視点の弱さ。
  - (4) 一面的な共同体解体論の理論的要因として、“個人の自立”の多層的内実の存在

論的個人主義への一面的還元。

主な参考文献

内山 節 2010、『共同体の基礎理論』農文協

尾関周二 2009、「〈農〉の思想と持続可能社会」（『環境思想・教育研究』第3号）

亀山純生 1989、『人間と価値』第3部、青木書店

亀山純生 2005、『環境倫理と風土』大月書店

亀山純生 2009、「地域再生のコンセプトとしての風土の意義」唯物論研究協会年誌 14

竹井隆人 2007、『集合住宅と日本人——新たな『共同性』を求めて』平凡社

広井良典 2009、『コミュニテイを問い直す』ちくま新書